

平成26・27年度
川崎市教育委員会研究推進校

外国語（英語）

表現力を高める指導の工夫

～第二言語習得理論とCLILで育てる～



平成27年11月27日（金）

川崎市立菅生中学校

研究推進にあたり

校長 長谷川雅之

学習指導要領では、生徒に「確かな学力・豊かな心・健やかな体」の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことを目指すことが掲げられています。また、新しい川崎市教育プランの基本理念では「夢や希望を抱いて生きがいのある人生を送るための礎を築く」とあり、基本目標には「将来に向けた社会的自立に必要な能力・態度を培うこと＝自主・自立」「ともに支えあい、高めあえる社会をめざす精神を育むこと＝共生・共働」が求められています。

2020年には東京オリンピックが開催され、今の中学生たちが競技選手として、開催国のスタッフとて、または日本に来日する多くの外国の方々を「お・も・て・な・し」する一員としての活躍が期待されます。また、最近の円安効果により、多くの外国の人たちが日本に来日しています。日本を代表する観光地やショッピングエリアでは、多くの外国の人を見かけることが当たり前の光景となりました。もはや誰でも英語による簡単な挨拶や情報伝達などのコミュニケーションができる必要があります。

本校は平成26・27年度の2年間にわたり、川崎市教育委員会英語科研究推進校として「表現力を高める指導の工夫」を研究主題に、初年度は「発表活動・書く活動・共同学習を通して」、2年目は「第二言語習得理論と CLIL で育てる」を副題に実践研究に取り組んできました。3年間で育てたい生徒像は「他を認め自己を発信することができる生徒」です。具体的な活動の一つに生徒の発話能力を育むために、毎時間帯活動の学習として small talk を設定し、ペアや小グループでの会話活動を通じて、実践的コミュニケーション活動を行いました。また、この小グループでの活動は、英語科だけの実践ではなく、各教科で小グループの話し合い活動を取り入れ、教科を超えた「言語活動の充実」への実践につながっています。また、今日めまぐるしい情報化社会の中で、情報端末などを利用した多様なコミュニケーション方法が広がり、SNSなどによる誹謗中傷などの問題も表面化しています。生徒は今回の学習活動に取り組むことにより、Face to Face による人と人とが直接相対するコミュニケーション力も学んでいます。この研究が生徒のこれからの豊かな将来に必ず繋がるものと確信しています。

最後となりましたが、このたびの研究推進にあたり、川崎市総合教育センター、川崎市中学校教育研究会英語科部会、東京家政大学教授の太田洋先生をはじめ、多くの方々にご指導、ご助言をいただきましたことに、深く感謝申し上げます。引き続き、「他を認め自己を発信することができる生徒」の育成をもって、新しい時代を切り開き、グローバルな社会をたくましく歩む生徒の姿を夢見て、さらなる授業改善につとめてまいります。

目 次

研究主題・研究の要約	4
I 研究主題の設定	5
1 今、英語教育に求められているもの	
2 本校生徒の実態	
3 平成26年度の研究より	
(1) 平成26年度の研究の概要	
(2) 平成26年度の研究の成果と課題	
4 平成27年度の研究主題の設定	
II 研究の内容	7
1 本研究を支える理論的背景	
2 第二言語習得理論	
3 CLIL	
III 研究の方法	10
1 本研究で取り組んだ3つの取り組み	
(1) 帯活動	
(2) 教科書本文	
(3) CLIL的な活動	
2 研究の構想図	
IV 授業の実際	13
1 帯活動について	
2 教科書本文を扱う授業	
(1) 検証授業1	
TOTAL ENGLISH 2 LESSON 1 - Japanese Sports -	
3 CLIL的な活動を扱う授業	
(2) 検証授業2	
TOTAL ENGLISH 1 Chapter 1 Project 「自分のことを伝えよう」	
(3) 検証授業3	
TOTAL ENGLISH 2 Lesson3 - Flight to the U.K. -	

(4) 検証授業4

TOTAL ENGLISH 3 Chapter 2 Project 「インタビューしよう」

V	研究のまとめ	24
1	研究の成果	
	①授業に活かすことができる継続的な帯活動	
	②第二言語習得理論に基づいた指導過程	
	③言語活動を支える CLIL 的な活動を仕組む	
2	今後の課題	
VI	参考文献	29

〈指導助言者〉 〈研究に携わった教職員〉

平成26・27年度 川崎市教育委員会研究推進校

外国語（英語）研究報告

研究主題

表現力を高める指導の工夫

～第二言語習得理論と CLIL で育てる～

要 約

本研究は、外国語（英語）科が中心となって取り組んでいる研究主題「表現力を高める指導の工夫～第二言語習得理論と CLIL で育てる～」についての実践研究である。

外国語（英語）科では「表現力を高める指導の工夫」を研究主題に学習指導を行っている。3年間で育てたい生徒像を「他を認め自己を発信することができる生徒」として設定し、具体的な目標として「中学卒業期までに学習した学習内容や中学校生活の思い出を小グループで卒業ビデオに収め、クラスで発表し、作品について意見を交換すること」としている。

平成26年度の研究では、最終目標に向け必要な技能を身につけるため、発表活動・書く活動・協同学習を学年や学習時期に応じて段階的に積み上げられるよう研究を進めた。積極的に授業に参加する生徒が増え、授業の場面に合わせた指導形態が定着するなど一定の成果を得ることができた。しかしながら一方で、課題として「各活動を有機的に結びつけて統合的な活動にする」こと、さらに「書く活動に関して生徒が考える活動を仕組む」ことが挙げられた。

そこで平成27年度の研究では各活動を有機的に結びつけて統合的に指導することを目指して、CLIL的な活動を目標に置き、第二言語習得理論に則った授業を積み上げていくこととした。

検証授業ではオーセンティックな題材を取り入れ、意図的に生徒同士がコミュニケーションを図り、課題を解決する活動を仕組んだ。生徒が意見を交換し、考えて発話する場面が徐々に見られるようになった。

内容を重視しながら、理論的に授業を構成することによって効果的に生徒の言語習得を促し、結果、表現力を高めることに役立っていることが分かった。

I 研究主題の設定

1 今、英語教育に求められているもの

グローバル化社会の進展など急激な変化が進む中、小・中学校における英語教育の拡充強化、中学校・高等学校における英語による言語活動の高度化、大学入試の4技能化など英語教育改革が急速に進んでいる。文科省からは「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」「英語教育改革実施計画」「2018年度より段階的に小学校5年生より外国語を教科化」「2019年度より中3に英語全国テスト実施」など矢継ぎ早に次々と施策が発表され、現場では「Can-Do Listの作成」「英語教育推進リーダーによる研修」「ICTやALTの効果的な活用」など日々対応に追われている。

また、第2次川崎市教育振興基本計画の「施策1. 確かな学力の育成」の中には「2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催やグローバル化の進展などを背景として、英語教育改革によるグローバル人材の育成が求められていることから、積極的に外国人と英語でコミュニケーションする児童生徒を育成するなど、英語教育の充実を図ります」と掲げられており、英語教育改革は全市をあげて取り組むべき課題ともなっている。

この背景には経済界からの要請や急激に変化する社会に適応できない若者の増加、急速な人口の減少に伴う外国人就労者の受入と共生など様々な要因が複雑に絡んでいる。

今、英語教育に求められているものは自分のアイデンティティをしっかりと持ち、他者や異文化を認め、友好的人間関係を構築するコミュニケーション能力を英語を通して育てることといえよう。

そこで、本校では「他を認め自己を発信することができる生徒」を理想の生徒像として設定し、外国語科で共通理解を持ち、この変化の激しい社会を乗り越え、互いを尊重し住みやすい多文化共生社会を築く生徒を育てることを目指すこととした。

2 本校生徒の実態

本校はまだのどかな田園風景が点在する小高い丘の上に立地している。生徒は活発素直で学校行事、部活動に積極的に取り組んでいる。学習に関しても前向きに取り組む生徒が多いが、苦手意識を持つ生徒も多い。英語に対しても入学当初から苦手意識を持つ生徒が多く、自信を持って発言することが難しい。生徒の苦手意識を取り除き、学習意欲を高め、自立的学習者に育てていく手立てが必要であると考えた。

3 平成26年度の研究より

(1) 平成26年度の研究の概要

本研究は川崎市の取り組みでもあるので、先行研究を継続・発展させるものを目指し、前推進校の西生田中学校で取り組んでいた「思考力・判断力・表現力（活用力）を育てる

授業作り ～チャット活動を通して～」から「チャット活動」を取り入れ、センターの長期研究として取り組まれていた「「気づき」を引き起こし、言語習得を促進する英語授業の研究 ―協同学習の要素を取り入れて―」から「協同学習」を取り入れ研究に取りかかった。また、英語に苦手意識を持つ生徒が多く、特に書く活動に自信を持ってない生徒が多いので、書く活動を工夫する取り組みも取り入れた。

そこで初年度の研究テーマを「表現力を高める指導の工夫 ～発表活動・書く活動・協同学習を通して～」とし、3年間で育てたい生徒像「他を認め自己を発信することができる生徒」を目指して発表活動・書く活動・協同学習を学年や学習時期に応じて段階的に積み上げられるよう研究を進めた。

発表活動では生徒の発話能力を育むために、毎時間、帯活動として small talk を行い、ペアや小グループで会話活動を行い、授業で学習した内容を実践的コミュニケーション活動の中で活用することを目標として活動させた。

書く活動では発表した内容や自分自身について文書にまとめ、レポート発表する活動を行った。他に発信することを目的として活動を行うことにより、思考力、判断力、表現力を養うことを目指した。

協同学習の取り組みでは発表活動・書く活動を行う際にペアやグループで活動することによって、相手を尊重する態度を養い、互いに高め合うことを目標とした。

以上の3つの活動を柱として、全ての活動の中で表現力を高める工夫を行った。

また、外国語（英語）科だけの研究にならないように全校で「言語活動の充実」を掲げ、拡大要請訪問の際には全教職員で「言語活動の充実」をテーマに授業を行い、ご指導いただいた。また、研究推進通信を作成し共通理解を図った。

（2）平成26年度の研究成果と課題

1年間の取り組みの成果として積極的に授業に参加する生徒が増え、授業の場面に合わせた指導形態が定着するなど一定の成果を得ることができた。

課題としては、「各活動を有機的に結びつけて統合的な活動にする」こと「書く活動に関して生徒が考える活動を仕組む」ことが挙げられた。一つ一つの活動はよいのだが、すべての活動がつながりを持つように指導する必要性を感じた。ただ決められた活動を行うだけでなく、授業者が共通の理念を持って、今、目の前にいる生徒に合わせて丁寧に指導に当たる必要を感じた。

4 平成27年度の研究主題の設定

今、目の前にいる生徒の現状を踏まえ、生徒の興味関心にあった題材を取り上げ、共通した指導理念に基づき授業を構築するため、統合的な活動を目指して CLIL 的な活動を目標に第二言語習得理論に則って授業積み上げていくこととした。そこで、昨年度の研究主題を改め次のように設定し直し、研究に取り組むこととした。

研究主題

表現力を高める指導の工夫

～第二言語習得理論と CLIL で育てる～

II 研究の内容

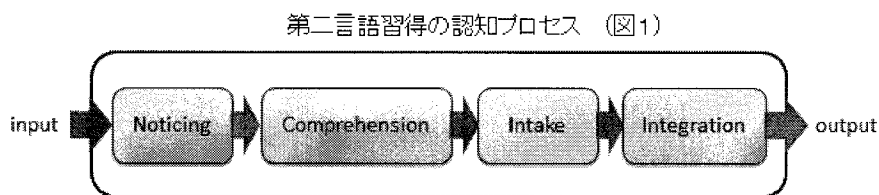
1 本研究を支える理論的背景

本研究の支えとして第二言語習得理論と CLIL を取り上げることとなり、研究のテーマとしては大きくなりとなったが、指導者の個性を生かし、生徒に寄り添う指導を実現させる大切な考え方とし、敢えて研究の柱として設定した。学校として3年間に渡り生徒を育てるのであるから、指導者が共通の指導理念のもと指導することがとても大切なことであると考えた。

2 第二言語習得理論

第二言語習得 (second language acquisition / SLA) については様々な考え方があるが、ここでは特に教室における第二言語習得理論を取り入れる。基本的な考え方は村野井(2015)によるが、本校の生徒の実態に合わせてながら取り組んだ。

Gass(1988, 1997)によれば英語授業ではインプット(提示された教材や文法項目)からアウトプット(産出活動)まで図1のような過程を経て修得されると考えられている。



村野井(2015)によれば、第二言語習得の認知プロセスに基づいて行われる英語授業の指導形態は文法指導における ESA と検定教科書の読解を中心とした統合型の授業における PCPP に分けられる。

Harmer(2007)によれば第二言語習得の認知プロセスに従った文法指導には Engage, Study, Activate の3つの指導手順があるとされる。3つの指導手順はそれぞれ

○Engage (関わる・興味を持つ) : 生徒の関心を高めるために、内容のある oral introduction で題材を導入し、生徒の感情に訴えかける。

- Study（調べる）：言語形式、構造を調べ、理解を促すために、明示的な文法説明や意味のある文型練習を行う。
- Activate（活用する）：言語使用の機会を作るため、内容のある言語活動・オーセンティック(authentic)な学習を行う。

の手順を追って行われる。この指導形態は活動の目標を内容のある言語活動・オーセンティックな学習に置くことにより、CLIL 的要素を持った指導内容にも通ずるものであると考えることができる。

また、検定教科書の読解を中心とした技能統合型の英語授業は村野井(2006)に PCPP として示されている。指導手順としては

- Presentation（提示・導入）：題材内容に関する背景知識を活性化させるため、気づきを与えるoral introductionを行う。
- Comprehension（理解）：listeningやreadingによる内容理解を行う。必要に応じて明示的文法指導を行う。
- Practice（練習）：音読や発音練習を通して、文法事項の文型練習を行う。
- Production（表現活動）：Q&A、Story retellingで概要を発表したり、考えたこと・関連して調べたことの発表を行ったり、レポートを作成する。

とされている。この指導手順も Production（表現活動）を目標として授業を組み立てるので、ESA の文法指導と同じく CLIL 的要素を持った指導内容であるとも考えられる。

本校ではこの第二言語習得の認知プロセスに基づいて授業を組み立てることとした。授業を通して生徒にどんな力をつけたいのか、授業者が目標を明確にして授業を行うことにより、効果的に表現力を養うことができることを目指した。また、各授業が終末の産出の活動につながるように展開されることで、それぞれの活動が自然と統合されることになる。このことは CLIL 的な授業の展開に通ずる指導形態として扱うことができる。

3 CLIL

CLIL とは笹島(2011)によれば「教科科目などの内容とことばを統合した学習」である。中学の英語授業に当てはめて考えてみれば「教科書の題材などの内容とことばを統合した学習」ということができよう。これは第二言語習得の認知プロセスに基づいた授業でこそ指導しやすい。第二言語習得理論に則った学習を縦糸とすると指導内容と言葉を統合する CLIL は横糸と考えることができる。

池田(2011)によれば CLIL は次のように定義されている。

CLIL (Content and Language Integrated Learning) とは、教科を語学教育の方法により学ぶことによって効率的かつ深いレベルで修得し、また英語を学習手段として使うことによって実践力を伸ばす教育法のこと、学習スキルの向上も意図されている。さまざまな教育原理・技法を有機的に統合することで、高品質な授業を実現する洗練された教育法である。

CLIL の授業を構想する際、「4つの C」が有機的に結びつくように教材や授業を組み立てる。「4つの C」とは内容(Content)、言語(Communication)、思考(Cognition)、協学(Community)のことである。

- 内容(Content)とは新しく得られる知識、スキル、理解のことである。中学校で言えば検定教科書の題材内容や活動内容それに関連する副教材、活動を指す。
- 言語(Communication)とは言語知識の獲得や4技能の訓練といった語学学習と対人コミュニケーションツールとしての言語使用の両方を指す。ただし、CLIL では言語使用に高い比重が置かれる。
- 思考(Cognition)とは、これも2つの側面を併せ持つ。ひとつは知識や暗記を中心とする、浅く表面的な学習であり、もうひとつは学んだ内容を既存の知識や経験と結びつけたり、批判的に考察を行ったりする深い学習である。この2つの学習は相互補完的なものであり、バランス良く指導する必要がある。
- 協学(Community)とは学習される内容やグループのレベルを指す。ペアワークやグループワークは、クラスメートの経験や意見を共有することで共に学んでいく狭義の community 観に根ざしたものであり、教室内の仲間と協力して学習に取り組む協同学習にあたる。また、地球温暖化や熱帯雨林の伐採といった世界的問題をトピックとして扱えば、学習者を「地球市民」の一員として見なす広義の community 観となる。

これら4つのCを有機的に統合して授業を効果的に授業を進めていく。

また、CLILにはさまざまなバリエーションがあるが、中学校で実施する際には、初めのうちはいわゆる Soft CLIL で単発もしくは授業の一部で、日本語も交えつつ弱形の Weak CLIL で進めるとよいといわれている。今まで行われていた英語授業で4つのCを意識し教科書の内容を深める副教材を使用したり、生徒に考えることを促す発問を工夫することによって実施することができるであろう。豊かな表現力を高めるために、ぜひ取りみたい指導法の一つである。

本校としては、様々なCLILの定義の中から、昨年度の研究成果、生徒の実態、我々の目指す理想の生徒像、地元川崎を生かす、日々の授業の中で取り組めることなど検討を重ね、本校が取り組むべきCLILの重点項目を次の3点に定め、意識して授業を計画し、指導を行

うこととした。

- 教科書の題材を深めるオーセンティックな教材
- 教師と生徒、生徒と生徒のインタラクションで考える場面を仕組む
- 協同的な学びを通して他者理解を深める

Ⅲ 研究の方法

1 本研究で取り組んだ3つの取り組み

研究主題「表現力を高める指導の工夫～第二言語習得理論と CLIL で育てる」を達成するため、本校の理想とする生徒像「他を認め自己を発信できる生徒」を目指し、第二言語習得理論に則り、教科書指導を PCPP、文法指導を ESA の手順で行い、豊かな表現力をはぐくむため CLIL 的な活動に統合することとした。また、それぞれの活動・授業をつなぐために帯び活動を毎時間行い生徒の表現力の基礎を養うようにした。

研究の構想図を次のページに示した。この活動を実際の授業の中で取り組むために研究員で協議し、以下の3つの学習活動を工夫することによって具体的な指導に当たることとした。

(1) 帯活動

毎時間の活動の積み重ねがなければ、生徒の表現力は育たない。生徒の表現活動を支える学習内容の復習やこれから取り組む活動に役立つ活動を毎時間継続的に行う。

(2) 教科書・文法指導

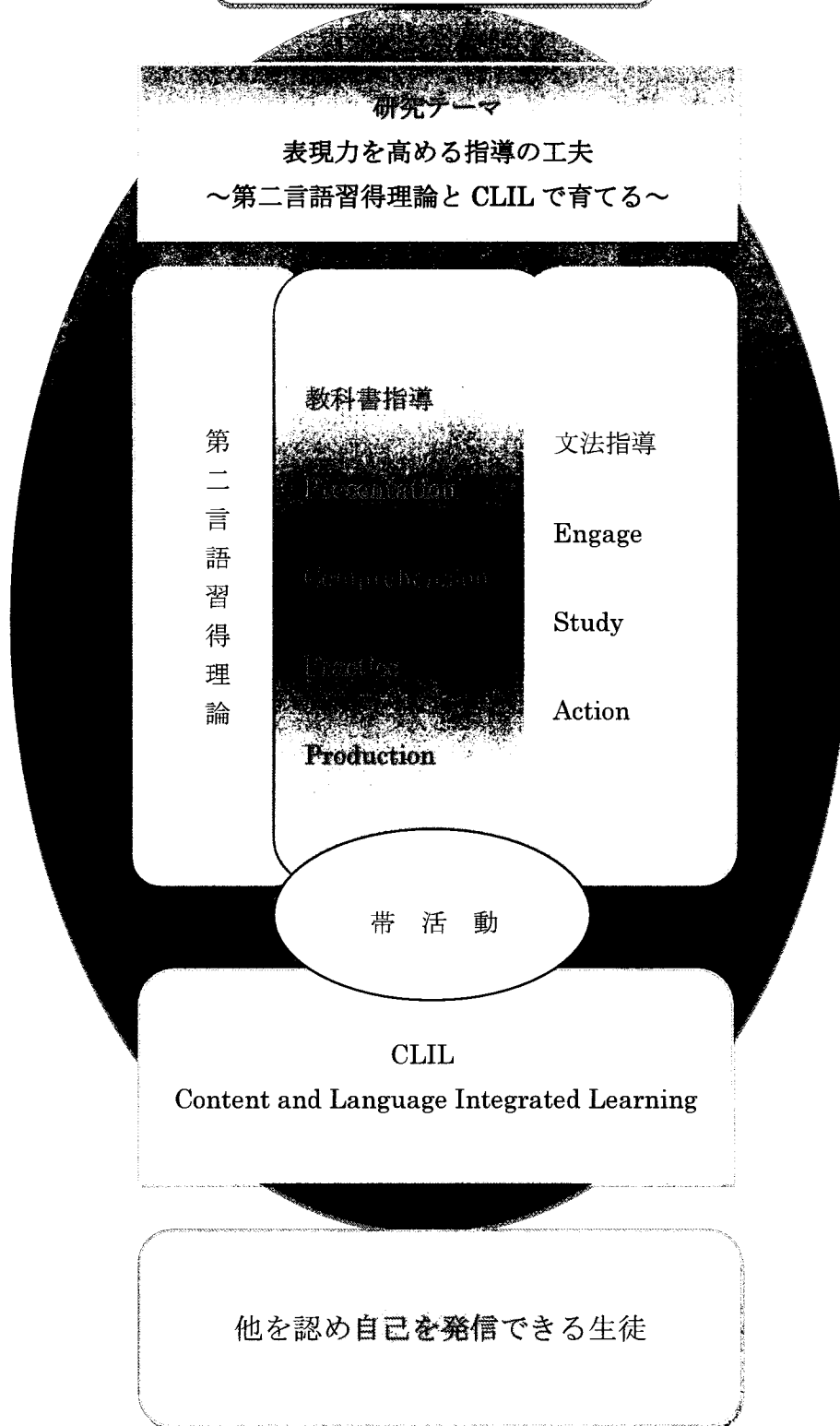
教科書・文法指導については最後に本文の内容を再生したり、オリジナルのスキットやスピーチを発表させるなど、産出の活動を目標に設定し、インタラクションによる内容理解や音読の活動、グループによる協同的な活動を重視する。

(3) CLIL 的な活動

CLIL 的な活動を目指しⅡ－3で挙げた本校が取り組むべき、3つの項目を意識して授業を構成する。

2 研究の構想図

研究の概念



川崎市立菅生中学校英語科 「他を尊重し自己を発信できる生徒」の育成

Daily activities

- Textbook chunk
- Target sentence relay
- Who am I?

Occasionally

- Vocab test
- Reading test
- Presentation
- My treasure

Examinations

- Mid-term Exam
- Final Exam

Daily activities

- One minute chat

Occasionally

- Vocab test
- Speaking test
- Presentation
- Diary
- My town

Examinations

- Mid-term Exam
- Final Exam

Daily activities

- One minute chat

Occasionally

- Vocab test
- Speaking test
- Presentation
- Debate
- SUGAO TED

Examinations

- Mid-term Exam
- Final Exam

IV 授業の実際

今年度取り組んできた具体的な取り組みについて、帯活動、教科書本文、プロジェクト活動の順に報告する。帯活動については毎時間、通年を通して行われるものであり、段階的に積み上げる活動でもあるので、主に今年度前期に取り組んだ、(1) Who am I? (2) Target sentence relay (3) One Minute Chat の3つの活動について報告する。教科書本文、CLIL 的な活動については校内授業研究会で取り組まれた授業を元に報告する。

1 帯活動について

帯活動として本校では1年生から段階を追って継続的に表現力を育てる活動を行っている。1年生の初めは、小学校で取り組まれているチャンツ活動を元に語彙の習得から始まって、徐々に意味のまとまりを持つチャンクに発展させ、センテンスまで毎時間練習を積み重ねていく。

夏休み明け頃から"Who am I?"などの Q&A を使用した活動を行い、応答に慣れさせる。1年生の終わり頃から過去形がスタート、疑問詞が出揃うところで、昨日の出来事についての Q&A へと活動を発展させていく。1年生の段階ではあまり背伸びをせず定型表現に習熟させることを目指している。

2年生から自然な発話を促す活動へと徐々に導いていく。過去形、現在形、未来形など、時制を意識させたり、1つのテーマを掘り下げる表現を織り交ぜながら会話活動を行う。いずれも教科書の既習事項をベースに本文の内容を取り入れながら授業に活かせるよう配慮する。

3年生では相手の意見を尊重し、自分の考えを発信することを意識させる。3年生最後に予定しているディベートや卒業ビデオにつながるよう指導する。

まず、はじめに1年生で取り組んだ(1) Who am I? (2) Target sentence relay を紹介する。

(1) Who am I? Quiz

生徒はグループで着席している。代表者はワークシートとペンを取りにきて、準備が出来たところで開始する。指導者は答えを予め写真や絵として用意しておくが最後まで見せない。ヒントは3段階で出題し、答えの説明になるようにヒントを出す。第1ヒントは最も答えに遠いものにし、第2、第3となるごとに具体的なヒントにしていく。第1ヒントでわかったら30ポイント、第2でわかったら20、第1なら10、のポイント制にして答えをワークシートに記入する。後から答えを変えられないようにペンで書かせる。問題は2問までとし、終了後は裏にコメント欄を設けているので難しかった部分はどこか、〇〇の英語が今日分かった、など1分でミニ感想を書かせて回収する。

活動を通して見られた生徒の様子

- ・ 正解すると単純に嬉しいが、グループで「今の英語、〇〇って意味かな」と話し合っ

いく中で生徒同士の想像力が駆り立てられるとともに授業の空気が温められ、仲良く活動できるようになっていった。

・たとえ知らなかったことが答えだったとしても、或いは答えを間違えたとしても、「そこは気にしないでいい、次は当てたいからまたやりたい」という思いに子どもたちが自発的に変化していった。

・キャラクターや政治家、時には食品やスポーツなど、さまざまな名詞を準備することで、興味関心がないことが答えであっても「今日はなんだろう、参加しよう」という意欲につながっていった。

(2) Target sentence relay

生徒はグループで着席している。ワークシートには学習し身につけてほしいターゲットセンテンス（質問文とその答え方）が最低でも6種類以上書かれている。最初の日はこのクラスでリピートし、意味を確認し、どう答えるかの例文を確認して、言えるようにする。そして自分の答えを言えそうなら例文を介して変えていいことを伝えると、それぞれの質問にどう答えようかと各自が考え始める。さまざまな答えがあることを予測して、指導者も答えを考えるためのヒントを与える（教科書に掲載されている部分のページを伝えたり、この教室の〇〇をみると書いてあるよねと目を向けさせてみたり等）。順番を決めるじゃんけんをし、1番から時計回りで質問をし、グループ全員がそれぞれに答える。答えが同じときは既習の“... .. too.”が言えるといい、と伝えている。時間設定をし、時間内にワークシートのどこまで英文が言えたかを確かめていく。それぞれ言いたいことがあっても、きちんと発音できなかつたり英語が流暢に産出されず、なかなか簡単にはすべての文章を言い切れないが、徐々に設定時間を短くしていく。自分の思う答えがない場合には、または自分の考えを言うことが難しい時には、例文のまま言いなさい、と伝えている。したがって、何も言わないでいることはないように配慮している。

活動を通して見られた生徒の様子

・大量に情報をインプットして練習を繰り返す、という活動を、限られた時間の中で行うことで流暢に、またすぐに次の英語が出てくるように（やや強制して）定着させる。「これきたらこの答え！」のような、クイックレスポンスを啓発する。

・繰り返していくうちに全ての英文が言えるようになっていくので、達成感や自分も言えたという実感・自信が持てる。

・活動を繰り返すうちに知らぬ間に英語を言いたくなってきて（時間までに全部を言いたい気持ちになってくる）、生徒同士が互いに近づいたり、飛び上がって話していたりするようになり、いつの間にか笑顔で話すことができるようになる。

・間違っていることを答えた生徒がいたとき、例えば色を尋ねているのにスポーツを答えるような生徒がグループにいたときは「ちがうよ、いまカラーだよ」と嫌味無く教えあい、更に教えた生徒も自分の番がきたら答えるので、間違えた生徒が自分の訂正をするだけで

なく仲間同士で確認することが出来るようになる。

以上、1年生で行った2つの活動を紹介した。2つの活動ともにクイズや学習内容の復習という生徒にとって取り組みやすい題材を扱ったことで、興味関心を引出すことができた。また、協同的な学習を行うことによって参加意識を高め、意欲を引き出すことに成功した。1年生終盤から取り組む会話活動への橋渡しとしてよい準備となった。

(3) One Minute Chat

次に2年生から取り組んだ One Minute Chat を紹介する。次のような手順で進める。

- ① ペアによる日本語から英語を再生する活動をワークシートを使って1分間ずつ交代しながら行う。
 - ② ペアを替えながら1分間自由会話を3回行う。
 - ③ 代表のペアがクラスの前で発表し、教師が講評し次回に活かせる表現を確認する。
- ALT が参加しているときには、「ALT に挑戦」といって ALT と一対一で会話する。

今回、工夫した点は生徒の自然な会話を引き出すため、教科書の題材をもとにオーセンティックな川崎にこだわった内容を盛り込んだことである。教科書で学んだものを身近な題材に置き換えることで生徒の意欲が触発され、後の自由会話で自身の経験に基づいて会話しようとする生徒が増えた。また、ワークシートの下部に Can-Do リストによる自己評価欄(図2の囲み部分)を設け、教師の求める到達目標を生徒に伝えるとともに、生徒の活動の足場かけ(scaffolding)となるように具体的な評価項目を記述し提示した。

One Minute Chat have to~ (2年生) No. 12

	English	/	/	/	/	Japanese
1	Hello. How are you?					こんにちは。げんき？
2	I'm fine. How about you?					元気だよ。あなたは？
3	I'm fine, too. Do you have to work this weekend?					ぼくも元気だよ。週末何か用事があるの？
4	No, I don't. How about you?					ないよ。きみは？
5	I don't have to work, either.					僕も用事ないよ。
6	Shall we go to Sibuya, then?					じゃあ、渋谷に行かない？
7	Great idea. Let's take the bus and train.					いいね。バスと電車で行こう。
8	Sound exiting! How long does it take to Shibuya?					わくわくするな。渋谷までどのくらいかかるの。
9	About one hour and 15 minutes.					だいたい1時間15分くらいかな。
10	It's close! Let's go to HIKARIE.					近いね。ヒカリエに行こうよ。
11	What will you do there?					そこで何するの？
12	I will go shopping. I want a new shoes.					買い物するんだ。新しい靴を買うんだ。
13	What will you do there?					君は何するの？
14	I will eat sweets. There are a lot of sweets.					スイーツを食べるんだ。たくさんスイーツがあるんだ。
15	Oh, that's good. I get hungry.					へー、そいつはいいね。お腹空いてきちゃった。

	/	/	/	/	Class	No.	NAME

与えられたテーマに関して、自分の意見を交えながら、1分間会話を続けることができる。	Day1	Day2	Day3	Day4
① ワークシートを見ながらであっても、会話を続けることができる。				
② ワークシートを見ながらであれば、会話を続けることができる。				
③ 結果を交えながらであれば、ワークシートを見なくても、1分間会話を続けることができる。				
④ 与えられたテーマに関して、自分の意見を交えながら、1分間会話を続けることができる。				

図2 One Minute Chat の CAN-DO リスト

CAN-DO リスト拡大

与えられたテーマに関して、自分の意見を交えながら、1分間会話を続けることができる。

- | |
|----------------------------------------------|
| ① ワークシートを見ながらであっても、会話を続けることがむずかしい。 |
| ② ワークシートを見ながらであれば、会話を続けることができる。 |
| ③ 話題を変えながらであれば、ワークシートを見なくても、1分間会話を続けることができる。 |
| ④ 与えられたテーマに関して、自分の意見を交えながら、1分間会話を続けることができる。 |

CAN-DO リストの各段階の構成 長沼 (2008)

- | |
|------------------------------------|
| ① 自信を持ってできない段階 |
| ② 自信があまりない学習者でも何らかの補助的な援助があればできる段階 |
| ③ 多くの学習者にとって目標となり得る達成可能な段階 |
| ④ 自信のある学習者をあきさせないような挑戦的課題を設けた段階 |

単に会話活動を繰り返し行うだけでは、何ができるようになったのか、何ができればよいのか不確かなまま学習が進んでしまう。活動の到達目的を示し、生徒のできたという自己肯定感を育み、やがては自立的学習者を目指す橋渡しとなるものとして活動の最後に内省の機会を設けた。

現在、各校で3年間の到達目標を念頭に置いた CAN-DO リストの作成が進んでいるが、これからは生徒の学習の支えとなる CAN-DO リストの開発も大切であると考えている。長沼(2004)によれば「CAN-DO リストの利用にあたっては、学習者が学習への取り組みを「内省」することが重要であり、できたかどうかをチェックリストで判断するだけでなく、学習者の振り返りのコメントを記述することに意義がある。自己評価にあたっては、学習者の認知発達を促し、自己への批判的まなざしを培っていくことが肝要であり、学習の意味を自己の中で主体的に価値づけ、学習への関与を高めていくことが、学習者を自立的に動機付ける。こうした学習の価値の内在化には、教師と学習者との関係性が大きく関係してくる」とされている。学習者が自立的な学習者に育つ足場かけとして毎時間内省の機会を与えるとともに、生徒の現状を把握することで、よりよい授業改善につなげることができた。こちらが声をかけなくても、顔を上げて話す生徒が増えた。

2 教科書本文を扱う授業

教科書本文を扱う授業の検証を報告する。教科書を扱う授業は指導案に示した通り、第二言語習得理論に則り、PCPP の形式で展開されている。最後に代表生徒が本文内容を産出する活動を目標に、A 気づき、B 理解、C 練習、D 産出の順に授業が進められる。

また、昨年の研究成果から指導形態を学習場面に最も適した形にし、効率よく学習を進めている。指導案の各活動の頭に示された記号が、それぞれ、**W**… whole class **G**… work in groups **P**… work in pairs を示しており、本校で研究を重ねた結果、学習場面によ

って学習の形態を適切な形に変えて指導することが効果的であることが分かった。特にグループについては協同学習を意識し、4人の小グループを採用している。話し合いが活発になるとともに、協力して課題に取り組むことにより、気づきや理解を促進し、学習内容の内在化につながっている。今回は単語の確認、内容理解のためのQ&Aに取り組んだが、協同でStoryを再生するJigsawや聞き取った内容を復元するDictgloss Swain(2001)なども効果的である。

今回の検証授業では残念ながら産出の活動には至らなかったが、最後の産出の活動を意識して教師のイントロダクションや音読に生徒が真剣に取り組む姿が見られた。授業後の研究協議の中で「One Minute Chatや音読の練習に生徒が真剣に取り組んでいるのは産出の活動があることを生徒が意識して取り組んでいるからではないか」という意見が多く出された。計画的に目標を持って授業を行うことの大切さを改めて感じた。

また、課題として出されたこととして「While Readingにおいてもう少し生徒が自ら考える発問を与えるべきではないか」という指摘があった。生徒の思考・判断を促す発問の工夫をしていく必要性を感じた。田中(2009)などを参考に生徒が考える必然性のある発問を開発していきたい。

(1) 検証授業 1 TOTAL ENGLISH 2 LESSON 1 - Japanese Sports -

[2015年 6月 1日 (月) 第6時限 2年1組]

本時の展開 ※記号：W... whole class G... work in groups P... work in pairs

	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
導入	W あいさつをする。 P One Minute Chat ・ペアで会話表現を練習する。 ・ペアで相手を変えて、1分間自由会話を行う。 ・代表ペアが1分間自由会話を行う。	・生徒たちの反応により声掛けを工夫する。 ・机間指導しながら支援する。	・間違うことを恐れず、意欲的に表現活動を行っているか。
展開	W 本文の聞き取りを行う。 Picture cardを見ながら本文に関する聞き取りを行い、本文に関して興味関心を持つ。	・内容が聞き取れるよう補助的な知識を与える。	・注意を向け授業に取り組もうとしているか。
	P 新出単語を確認する。 ペアで新出単語を確認する。 新出単語を使ってオリジナルの文を作る。 単語の発音練習を行う。	・ペアで協力して取り組むよう励ます。	・ペアで協力して取り組んでいるか。
	G 本文に関するQ&Aに答える。 グループで協同しながら答えを考える。 答えの根拠となる箇所アンダーラインを引く。 本文を参考に答えを導き出す。	・グループで話し合いながら取り組むよう支援する。	・グループで協力しているか。
	W 本文の内容確認 Q&Aに答えながら本文の内容を理解する。 1. When does Ms. Hall practice judo? 2. What does Ms. Hall look like? 3. Do many people around the world do judo today? 4. Who uses Japanese words in judo matches?	・生徒とインタラクションをとりながら内容を確認する。	・日本のスポーツについて、聞いて理解しようとしているか。

	W 本文の音読をする。 ①Chorus Reading ②Buzz Reading ③穴あき Reading ④Picture Reading	・読みにくいところを支援する。	・相手を意識して音読しようとしているか。	C
	代表生徒が Picture Reading をする。	・代表生徒を評価し、ポイントを全体で共有する。		D
まとめ	W あいさつ 元気よくあいさつをする。			

1. 授業のねらい

今年度最初の校内授業研究であったので、まずは外国語科の中で共通理解が持てるように昨年度行っていた研究をもとに授業を組み立てた。ポイントは

- ウォーミングアップの帯活動として One Minute Chat を行い、生徒の授業への意識を高めるとともに、最後の産出活動につながる表現を練習させる。
- 小グループで協同で行う学習を盛り込み、お互いに協力する活動を行う。
- 題材内容をインタラクションで確認し、産出活動につなげる。

2. 授業の様子

授業者の都合で授業が延期となり生徒が戸惑うところもあったが、丁寧に授業を進めることで補った。



- One Minute Chat についてはまだ活動を始めて間もないこともあってところどころ途切れるところもあったが、意欲的に会話をしている姿が見られた。生徒の活動プリントの中には「会話活動は楽しい。」という感想が複数寄せられた。
- 協同的な学習については今回、単語の確認と内容理解を行った。リーダー的な生徒が徐々にではあるが育ってきて、協力して取り組もうとする姿が見られた。
- 残念ながら研究授業内で産出の活動を行うことが出来なかったが、次の授業で産出活動を行った。一通り教科書の内容を産出することはできたが、教科書を暗唱している部分が多かった。

3. 今後の課題

- One Minute Chat については Q&A の単発的な応答の繰り返しで終わってしまっていることが多い。一つのテーマをもう少し膨らませて会話を発展させ、「豊かな表現力」を身につけさせたい。本校の課題でもある書く活動にもつながるように、日記を書く中で一つのテーマを深く掘り下げる練習を行い、会話の中で使うように導きたい。
- 共同的な学習については生徒が考える仕掛けを仕組んでいきたい。知識理解に関する課題だけではなく、教科書の内容を深めたり、生徒の実生活に置き換えたりしてみんなが考えられる課題を工夫していきたい。
- 産出については Picture Card をヒントに今まで学習したことを使いながらなんとか本文の内容を伝えることができるように指導していきたい。

3 CLIL 的な活動を扱う授業

(2) 検証授業 2 TOTAL ENGLISH 1 Chapter 1 Project 「自分のことを伝えよう」

[2015年 6月 22日 (月) 第5時限 1年1組]

本時の展開 ※記号：**W**... whole class **G**... work in groups **P**... work in pairs

	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
導入	<p>W</p> <ul style="list-style-type: none"> あいさつを交わし、曜日と天気の確認をする。 個人にも (日替わり) 数名あいさつを交わす。 <p>G</p> <ul style="list-style-type: none"> Who am I? Quiz …帯で行っている協同学習動機づけ活動 (リスニング) 教師が何に成り代わって自己紹介しているか考える。 45 Seconds' Challenge …既習の動詞を用い一問一答形式で行うトークラリー A to B: I like basketball. What do you like? B: I like tennis. B to C: I play baseball. What do you play? C: I play the piano. C to D, D to A, A to B ... rotating for 45 seconds 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒たちの反応により声掛けを工夫する。 机間指導しながら支援する。 グループで協力し合いながら取り組むよう支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> 間違ふことを恐れず、意欲的にグループで活動を行っているか。
展開	<p>G</p> <ul style="list-style-type: none"> 発表原稿を各自準備し、発表の練習を行う。 グループ内で発表し互いにアドバイスしあう。 活発な意見交換をし、本時の発表を向上させる。 良い発表を確認しあい、発表に自信を持つ。 <p>W</p> <ul style="list-style-type: none"> 各自発表準備 (映像や持参したもの) をする。 発表順を再確認する。 発表マナーや聞く態度、ワークシートの確認をする。 <ul style="list-style-type: none"> しっかり発表を見る。 Do you? を使って発表者への質問を考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>◎評価方法</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒も模擬評価者として発表を見て、ワークシートに記入する 評価は観点を元に3段階で評価する A* (表現が豊かで工夫があり、聞き手にわかりやすく自分のことを伝えていた) A (必要条件を満たし学習した数種類の動詞を活用できているがもう少し工夫があっても良かった) B (必要条件はだいたい満たしていたが動詞が like のみに留まるなど表現が限定的なものであった) </div>	<ul style="list-style-type: none"> 時間の制限を設け、本時の活動に意識を持たせる。 発表者が過度に緊張していないか、状況に応じて支援する。 生徒がグループで練習した時と同じように準備した通りにできるように支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表のルール確認を意識しているか。 発表者に注意を向け仲間の発表を聞こうとしているか。 間違ふことを恐れず、できるだけ原稿を見ずに自分の紹介を仲間に伝えようとしているか。 スピーチ原稿としてまとまりのある英文を構成し、発表活動に生かしているか。 ワークシートに記入しているか。
まとめ	<p>W</p> <ul style="list-style-type: none"> 本時の発表活動を振り返る。 全員で初めての発表活動を称えあう。 元気に授業終わりのあいさつをする。 発表原稿を提出する。 	<ul style="list-style-type: none"> ①他者の発表を見て刺激を受ける面白さ②それを次回の授業での言語活動につなげる展望を生徒が持てるようフィードバックをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 初めて発表できた達成感を共有できているか。

1. 授業のねらい

第1学年の6月ということもあり、まずは classroom English, English routine work などの定着、「英語の時はこうする」という共通理解を促していった。その中で、3から4名の協同学習スタイルの定着と共に、授業で学習してきた語句や表現を用いてクラスの仲間

に「自分のことを英語で伝える」をねらいとした show and tell 方式での発表活動を行った。

- “Who am I?” Quiz や Target sentence relay などのウォームアップを継続し、グループで考え、また男女関係無く誰とでも話せる練習を繰り返し行った。
- 間違えたとしても大丈夫という雰囲気を楽しみながら日々耕していく。
- 英語が慣れてきてだんだん言えるようになってきたら、スピードを変え、例文を自分自身の嗜好に置き換えてよりオリジナル化するよう勧め、生産的な活動につなげる。

2. 授業の様子

説明しなくてもすぐ入ることが出来る活動と、どうしても説明が必要な活動、また英語の授業以前に中学生としての学習規律が求められる活動とが混在する環境ではあるが、基本的にはどんどんインプットし、時には教科書の順序にとらわれず（たとえばこのページまでの段階では listen to は学習していない）活動した。生徒たちは「知りたい」と思っており、分かったら「それを使いたい」と思い、意欲的に活動に臨んだ。

戸惑いのある生徒に対し、「ちがうよ、こうだよ」と教えあう様子が徐々に見られ、出身小学校が異なることで臆病になっている生徒同士も少しずつ籬を外してく様子が見られた。

発表に際しては、原稿の完成後、まずは協同学習のグループで発表練習を行い、より自信をもって発表できるようにアドバイスをし合うことを促した。

3. 今後の課題

音でいろいろな言語材料は小学校での学習も併せると既に入っているもので、もう少し正しく、文章も複数の s など訂正して、「きちんと」発表できるようにさせたほうがいい、とのアドバイスをいただいた。

発表することは緊張も伴い、なかなか準備をしっかりとんでもそれが発揮できないケースもあるので、いつでもできる、というような自信をもてるよう、今後は語彙も増えるのもっと頻繁に（構えて準備しなくてもいい範囲のアウトプットとして）活動に取り入れたい。

(3) 検証授業 3 TOTAL ENGLISH2 LESSON3 - Flight to the U. K. 飛行機でイギリスへ - [2015年 7月 9日 (木) 第5時限]

本時の展開

※記号： **W**... whole class **G**... work in groups **P**... work in pairs

	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
導入	W <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつを交わし、曜日と天気の確認をする。 ・個人にも（日替わり）数名あいさつを交わす。 P <ul style="list-style-type: none"> ・Lesson チャンク …帯で行っている協同学習活動（暗唱） 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒たちの反応により声掛けを工夫する。 ・机間指導しながら支援する。 ・ペアで協力し合いながら取り組むよう支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・間違うことを恐れず、意欲的にペアで活動を行っているか。
展開	G <ul style="list-style-type: none"> ・発表原稿をそれぞれ準備し、発表の練習を行う。 ・グループ内で発表し互いにアドバイスしあう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間の制限を設け、本時の活動に意識を持たせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表のルール確認を意識し

	<ul style="list-style-type: none"> 意見交換をし、よりよい発表を目指す。 良い発表を確認しあい、発表に自信を持つ。 <p>W</p> <ul style="list-style-type: none"> 各自発表準備（映像や持参したもの）をする。 発表順を再確認する。 発表マナーや聞く態度、ワークシートの確認をする。 <ul style="list-style-type: none"> しっかり発表を見る。 各グループの発表をワークシートに評価する。 発表グループへの質問を考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>◎評価方法</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒も模擬評価者として発表を見て、ワークシートに記入する（別紙） 評価は観点（態度、発音、内容、WAO!）を元に4段階で評価する(WAO!は有無のみ) </div> <ul style="list-style-type: none"> 発表グループへの質問をする。 自分自身の発表後は、自己振り返り欄に記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表者が過度に緊張していないか、状況に応じて支援する。 生徒がグループで練習した時と同じように準備した通りにできるよう支援する。 	<p>ているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 発表者に注意を向け仲間の発表を聞こうとしているか。 間違ふことを恐れず、できるだけ原稿を見ずに自分の紹介を仲間に伝えようとしているか。 スキット原稿としてまとまりのある英文を構成し、発表活動に生かしているか。 ワークシートに記入しているか。
<p>まとめ</p>	<p>W</p> <ul style="list-style-type: none"> 本時の発表活動を振り返る。 全員で初めての発表活動を称えあう。 元気に授業終わりのあいさつをする。 発表原稿を提出する。 	<ul style="list-style-type: none"> ①他者の発表を見て刺激を受ける面白さ②それを次回の授業での言語活動につなげる展望を生徒が持てるようフィードバックをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 初めて発表できた達成感を共有できているか。

1. 授業のねらい

海外旅行での出来事を通して、今後の予定など未来の表現を読んだり聞いたりして理解し、また適切に話したり書いたりして表現できることをめざしている。さらに、仲間の発表した英語を理解し、それに応じた質問をする。自分の言葉が伝わったという実感や英語で発表できたという達成感を生徒たちが得て、以降の言語活動の向上にもつなげていきたい。ポイントは、

- 小グループでスキット作成を行い、お互いに協力する活動を行う。
- 小グループの作成に当たっては、メンバーの学力を考慮し、各班にリーダー的な生徒が入るように教員側で作成した。



2. 授業の様子

英語リーダーを中心に作成したスキットを発表していた。教員側が意図していたわけではないが、ほとんどの班が小道具を作成し、より臨場感のあるスキット発表となった。また、小道具がスキーマとなり、発表を聞いている生徒たちの意味理解の向上にもつながっていた。

- 発表の後に、聞いていた生徒たちからの質問を設けることで、一方的な発表に終始することなく、インタラクティブな活動させることができた。
- 発表後の質問では、当初は“What is xxxx?”などの内容「確認」の質問が多かった。しかし、いきさつ不明瞭なスキット発表から、“Why xxx?” “Where xxxx?”などの質問がでるなどの変容が見られた。

3. 課題

帯活動として、生徒たちはチャンク（教科書英文の一部）の暗唱についてよく取り組んでいる。ただし、暗唱したはずのチャンクが英文の中に入ってしまうと理解できなくなったり、表現活動に生かせていなかったりする生徒が少なからずいるようである。暗唱したチャンクを生かしていくための活動が必要だと感じている。

(4) 検証授業4 TOTAL ENGLISH 3 Chapter 2 Project 「インタビューしよう」

[2015年 9月 14日 (月) 第5時限]

本時の展開

※記号： **W**... whole class **G**... work in groups **P**... work in pairs

	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
導入	W <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ ・日直が曜日と天気の確認をする。 ・日直が単語ゲームを行う。 P <ul style="list-style-type: none"> ・One Minute Chat …帯で行っている会話活動 ・ペアで相手を変えて、1分間自由会話を行う。 ・代表のペアが1分間自由会話を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒たちの反応により声掛けを工夫する。 ・机間指導しながら支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・間違ふことを恐れず、意欲的に表現活動を行っているか。
展開	G <ul style="list-style-type: none"> ・質問内容を確認する。 ・インタビューをする。 G <ul style="list-style-type: none"> ・答えの内容をもとに、発表原稿を作る。 ・グループで協力して発表の準備を行う。 G <ul style="list-style-type: none"> ・発表原稿を作る中で、確認したい内容があれば再度質問をする。 G <ul style="list-style-type: none"> ・他の班のテーマについて、自分ならば聞いてみたいことを考えておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・質問に対する答えの内容をもとに、更に深く質問できるように支援する。 ・インタビューした内容をもとに、発表に向けて、わかりやすく原稿を作ることができるよう支援する。 ・机間巡視をし、質問にはその都度対応する。 ・他の班の発表に関心を持って聞くことができるよう、意識づけをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に質問しているか。 ・会話でよく使う表現を理解し、インタビューの中で必要に応じて使えているか。 ・質問に対する答えを理解しているか。 ・発表に向けて、まとまりを意識した原稿を書くことができるか。
まとめ	W <ul style="list-style-type: none"> ・次時の発表活動に向けて確認をする。 ・発表原稿を提出する。 		

1. 授業のねらい

3年生になって2回目のグループごとの発表活動である。調べたことをグループでまとめて発表した1回目の発表に対して、他者の話を聞き、聞いたことを別の形で発信して情報を共有することをめざしている。この授業では、ALTへの質問を班ごとに行う活動を行った。各グループ毎に事前に質問は用意していたが、グループで協力して会話をつなげていくこと、相手の答えによって、さらに深く質問をしていくことができることをねらいとした。

2. 授業の様子

帯で行っている英語での日直活動については、始めて1ヶ月目でクラスの半数が日直を体験した。日直の生徒に協力してゲームを楽しもうとする姿勢が定着してきている。One Minute Chat については、2年時から続けているため、すすんで会話にとりくもうとする生徒が多い。今回は、ALTへの質問に多く時間をとるため、ペアでの会話は1回のみとした。

ALTへの質問は、それぞれのグループにALTが入って会話をする形式にしたため、リラックスして楽しそうに会話をする姿がみられた。質問する時間は各グループ毎に3分間、その後、さらに質問が出たグループは再度質問する形にしたが、ALTの回答からさらに話題を発展させて質問しようとするグループ、発表のための原稿を作っている途中でさらに質問が出てきたグループなどが見られた。

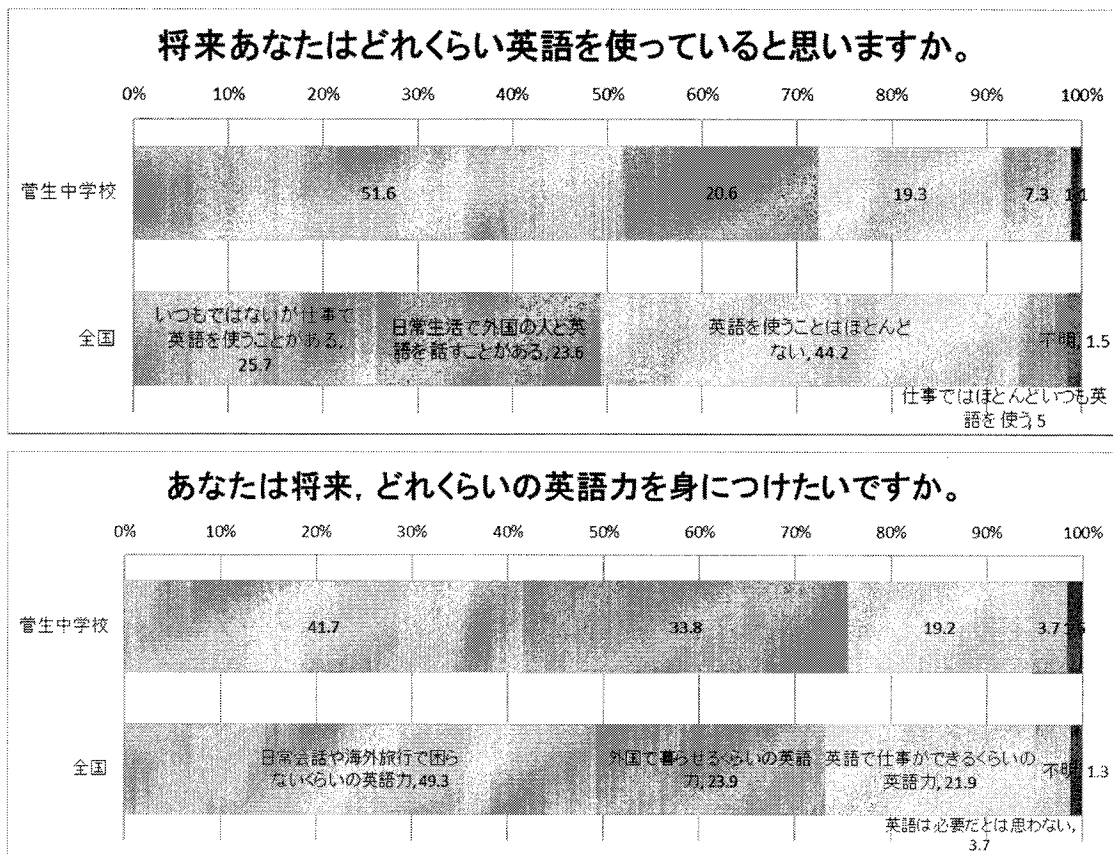
発表のための原稿作りに時間がかかっているため、発表前に原稿準備とグループでの練習時間をもう少しとることが必要だが、発表の形も「スピーチ」や「クイズ」、「質問の様子を再現する」など、各グループの工夫が見られるものとなった。

3. 今後の課題

One Minute Chat については、単語の羅列だけで終わらないよう使える表現を増やしていく、一問一答に繰り返しにならないよう視覚教材などを取り入れるなどの工夫をすることで豊かな表現力を身につけさせたい。そこで身についた力を、発表などの活動の中で実践的に使えるように指導していきたい。

V 研究のまとめ

1 研究の成果



平成27年7月に Benesse「第1回 中学校英語に関する基本調査」に基づき本校で行ったアンケートの結果から、特に「将来あなたはどれくらい英語を使っていると思いますか」と「あなたは将来、どれくらいの英語力を身に付けたいですか。」の2つの「将来の英語の活用」に関するアンケート結果に顕著な特徴がみられた。

「将来あなたはどれくらい英語を使っていると思いますか」では、将来英語を活用することに関する「いつもではないが仕事で英語を使うことがある。」と「日常生活で外国人と英語を話すことがある。」の調査結果を合わせると、本校の集計結果は72.2%で全国平均の49.3%を大きく上回っている。また、「あなたは将来、どれくらいの英語力を身に付けたいですか。」では「外国で暮らせるくらいの英語」と回答した生徒が本校では33.8%で全国平均が23.9%とこれも大きく全国平均を上回っている。普段、英語に触れる機会の少ない地域に住む生徒の現状を考えると、授業での取り組みが大きく影響を与えていると考えられる。

これは、本研究で年間を通して帯活動で毎時間英語を活用する機会を設けたこと、生徒と教師、生徒と生徒のインタラクションを大切に丁寧なコミュニケーション活動を行ったこと、CLIL的な活動の中でオーセンティックな題材を取り上げ、生徒の身近な話題と

して扱った今回の研究が生徒の中に英語を使う有用感を育み、将来英語を使いたいという動機付けを高めた成果の表れだと思われる。

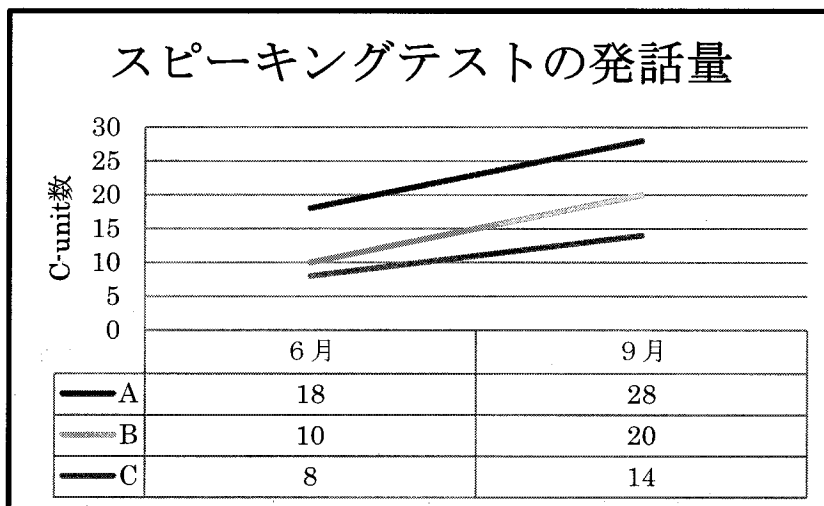
今回の研究では「表現力を高める指導の工夫」として、CLIL 的な活動を目標に第二言語習得理論に則って、本校の生徒に合った指導法を模索しながら授業に取り組んできた。One Minute Chat の発話量も全体的に増加し、CLIL 的な活動では生徒が何とか自分の言いたいことを英語で伝えようとする様子が見られた。まだまだ質的な改善などこれからさらに研究していかなければならない課題も残されているが、一定の成果は得られたと思う。

その他、様々な教育的示唆を得ることができたが、本校で取り組んだ活動を振り返り、次の3つの活動を提案する。

① 授業に活かすことができる継続的な帯活動

毎回少しの時間でよいので、継続して表現活動を行うことはとても重要である。特に、文法事項がレッスンごとに提示され、積み上げていく中学校の学習環境の中では繰り返し言語を活用する活動を行わなければ学習内容を定着させることは難しい。継続的に会話活動を行うことにより、既に獲得している知識へのアクセスを自動化(Automatization)することができるようになる。(DeKeyser(2007))

6月と9月に行ったスピーキングテストの結果を比較しても、飛躍的に発話の量が増加している。次のグラフはA,B,C3ペア（スコア上位、中位、下位）のC-unit数の発話量の推移グラフである。語や句、発話が途中で終わってしまう場合も多くT-unit数ではなくC-unit数で比較しているが、どのペアも10 points 近い伸びを示している。



6月の時点ではペアCは挨拶程度の会話を何とかやりとりしていたが、9月には過去の出来事について会話することができるようになった。ペアBはWh-questionのやりとりで何とか会話をつないでいたが、あるテーマについてまとまりのある会話をするようになってきた。ペアAは過去の出来事についての会話であればモデル文を参考に

会話をつなげることができていたが、相手の発言に対して即興で会話をつなげることができるようになってきた。このようにそれぞれのペアに質的な変化も見られた。これは、学習内容を使用する場면을授業の中で保証することによってのみ実現することである。

発話内容の質的な研究などまだまだ開発する余地はあるが、授業ののりしろとなる帯活動を継続し学習内容の定着を計り、授業に活かすことはとても大切なことである。

② 第二言語習得理論に基づいた指導過程

気づきから始まり、授業の後半に行う産出活動に向けて授業を組み立てていくことによって、目標を持って生徒が授業に取り組むことができるようになる。また、指導者も産出の活動を目標に授業のあらゆる場面に伏線を張ることができるようになり、効果的な指導を行うことができる。生徒が産出の活動に使えるような表現を多く使用しながら本文内容をインタラクションを通して伝えるなど、後の活動に行かせる取り組みを行うことにより、生徒に集中と、活発な発言を促し、授業を活性化させる。見通しを持った授業を行うことにより、生徒が安心感を持って授業に臨むことができるようになる。

③ 言語活動の支える CLIL 的な活動を仕組む

本研究では CLIL 的な言語活動を授業の中に取り入れるために、普段の授業のなかの 5 分程度の帯活動、学習した内容を用いて行う会話や Q and A などのちょっとした活動の中でも Soft CLIL として CLIL 的な活動を行った。本校では、前にも述べたが次のような項目を意識して CLIL 的な活動を組み立てた。

- 教科書の題材を深めるオーセンティックな教材
- 教師と生徒、生徒と生徒のインタラクションで考える場面を仕組む
- 協同的な学びを通して他者理解を深める

プロジェクト活動の中だけで CLIL 的な活動を行うだけでは、生徒の中に CLIL 的な学習態度は育たない。授業の中のちょっとした活動のなかで Soft CLIL として継続的に取り組んでいくことが大切である。

たとえば、教科書の内容に入る前に、アメリカの中学生の昼食時間の過ごし方を視覚教材で見せ、自分たちの昼食時における日常や単純に弁当の違いなどを話し合い、考える。その後、1・2行で振り返りや感想を書かせ「こんな感想もあったよ」と振り返りを共有させ、そこから「こんな言い方もいいよね」「こういう場合には英語ではどう伝えたらいいかな」など、自然に発生するよう授業空間に種を蒔き (scaffolding)、他者 (または異文化) 理解と実践的言語への探求心を耕すことを目指す。この活動が生徒に「気づき」を生み、後に続く教科書の内容理解を促す。

題材や学習形態を少し工夫するだけで、題材を通して、言葉で伝える (話す力)・理解できる (聞く力)・文字で読める (読む力)・文字に起こし文章にできる (書く力) 等の学習スキルの習得へと導いていくことができる。

協同的な学びを保証するためにもぜひ取り組んでいきたい活動である。

2 今後の課題

今回の研究を通して、発話量の増加、英語の使用に関する意欲の向上などある一定の成果が得られた。今後の課題としては発話の内容にかかわる質的な研究が望まれる。教材の開発や発問の工夫など、授業を通して研究を深めていきたいと思う。

また、今年度、研究員が半数入れ替わり、全員所属が異なる学年でスタートした。研究を行っていたおかげで、初めは戸惑うことが多かったが、研究を通して、生徒の考えを導き出すために様々な議論を重ねることができた。その結果、「育てたい生徒像」をより深く理解し、困難な状況を克服することができた。その過程がかえって自分の指導とは異なる土壌で育った生徒を認め、生かすことに繋がった。それは、授業作りの根幹を第二習得理論と CLIL という確固とした理論に求めたからだと思われる。単なるワークシートや活動を共有するのではなく、授業作りの考え方そのものを共有することによって実現できたのだと思う。

今後の課題となるのは、研究を終えた後さらに切磋琢磨し、授業を工夫し、より良い授業作りを続けることにある。今回の研究で培った太い幹を育て、これからも「他を認め自己を発信することができる生徒」を育てていきたいと思う。

おわりに

「他を認め自己を発信することができる生徒」を育てるために様々な指導法を取り入れ、研究を重ねてきた。しかし、研究を重ねるに連れて本当に大事なことは指導者、生徒が共に学び、よりよい学習空間を作ることにあることを実感した。

今回、研究を進める中で全校の研究となるように「言語活動の充実」について全教科で学び、研究授業を行った。また、英語科では研究を始めるに当たり、第二言語習得理論と CLIL にかかわる本を読み、ビデオを視聴することから始め、議論を重ねた。さらに、研究授業の際には他教科の先生方からもたくさんのアドバイスをいただいた。ことあるごとに「英語科で取り組んでいる協同学習の座席を試してみたよ」「研究推進通信よかったよ」など励ましの言葉をかけてもらい支えていただいた。英語科、一教科だけの研究では本当の意味での生徒の変容は期待できない。今回の研究を進めることができたのも本校職員の支えがあったからこそである。深く感謝している。

今回の研究をきっかけとして、「表現力豊かな生徒」が育つよう今後も研究を続け、学んでいきたいと思う。

今回の研究を推進するに当たり、川崎市立中学校教育研究会英語科部会部会長 金子勉先生をはじめ多くの先生方にお世話になりました。感謝申し上げます。

VI 参考文献

- 村野井仁 (2015) 『共生のための英語教育 —技能統合型の英語授業と内容言語統合学習による英語運用能力の育て方—』 英語授業学研究学会・関東支部第 19 回春季研究大会
- Gass, S. (1988). Integrating research areas: A framework for second language studies. *Applied Linguistics*, 9, 2, 1998-217
- Gass, S. (1997). Input, interaction, and the second language learner. LEA.
- Harmer, J. (2007). *The practice of English language teaching*(4th ed.). Longman.
- 村野井仁 (2006) 『第二言語習得理論から見た効果的な英語学習法・指導法』 大修館書店
- 笹島茂 (2011) 『CLIL 新しい発想の授業 —理科や歴史を外国語で教える! ?』 三修社
- 池田真、渡部良典、和泉伸一[共著] (2011) 『CLIL 内容統合型学習 第 1 巻』 上智大学出版
- 長沼君主(2008) 『CAN·DO 尺度はいかに英語教育を変革しうるか—CAN·DO 研究の方向性』 『ARCLE REVIEW』 No.2
- 長沼君主(2004) 『自立性と関係性から見た内発的動機づけ研究』 上淵寿編『動機づけ研究の最前線』 北大路書房(pp.30-60)
- Swain (2001). Integrating Language and Content Teaching through Collaborating Tasks. *Canadian modern language review*
- 田中武夫、田中知聡 (2009) 『英語教師のための発問テクニック—英語授業を活性化するリーディング指導』 大修館書店
- 池田 真 (2011) CLIL の方法論 www.cliljapan.org/
- 池田 真 (2013) 上智大学の実践「内容言語統合型学習 (CLIL) が切り拓く大学英語教育の可能性」 *Forum of Language Instructors*, Volume 8, 2014
- DeKeyser, R (Ed.) (2007). *Practice in a second language : Perspectives from applied linguistics and cognitive psychology*. Cambridge, UK : CUP.

〈指導助言者〉

川崎市立中学校教育研究会英語科部会

部会長 金子 勉 先生
副部会長 佐藤 剛 先生
前部会長 河野 勝彦 先生
指導主事 伊藤 敏明 先生
教授 太田 洋 先生

川崎市総合教育センター
東京家政大学

〈研究に携わった教職員〉

学校長 長谷川雅之
教 頭 高橋 敏昭

英語科 橋本 慎一 外山 瑞穂
永井 主税 (平成26年度)
Steven Perry

大林 篤生 伊豆 典子
小高 雅子 (平成26年度)

平成27年度 菅生中学校 教職員

西入 博貴	古頭 一哉	土倉 大	山本 愛
河本 咲子	児玉 大地	倉田 亮	関 信助
古川 貴明	松田 研一	富田 理香	川田 正樹
二瓶 哲哉	山本理恵子	小川 慎史	新井紀代美
片岡 義和	金子 瑞枝	鈴木正太郎	由良 文隆
今井なつき	小林 裕	加納しのぶ	梶木 莉紗
児玉 律子	山本 陽子	飯泉 恵子	野坂 泰子
下村 未来	石野 貴大	森 由香里	小川 幹夫
大和 紋子	秋山 弘美	荻久保巳津子	久保田良介

平成26・27年度 川崎市教育委員会 研究推進校

外国語（英語）
表現力を高める指導の工夫
～第二言語習得理論と CLIL で育てる～

発行 川崎市立菅生中学校
発行日 平成27年11月27日

印刷 (有)中溝グラフィック
TEL 044-333-2787
